

センタージャーナル

〒460-0016
名古屋市中区橘二丁目8番55号
TEL (052) 323-3686
FAX (052) 332-0900

■発行人／荒山 淳
■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター

立つ！
いのちの大地に
聞く！
いのちの叫びを

真実の学びから、
今を生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。



真宗門徒講座で報恩講について講義をする研究生

(写真の無断転用はご遠慮ください。)

もくじ

- ・聖典研修 第17・18回
『仏説阿弥陀経』
—その教義と真宗の儀式— ②・③
- ・大谷派の近現代史
「満洲開教」と「開拓民布教」 ④・⑤
- ・現代社会と真宗教化
どのように目の前の
悲嘆者と向き合うのか ⑥・⑦
- ・INFORMATION ⑧

◆イラストカット集(※寺報などにご利用ください)

煩惱の花の都と

鐘が鳴る

句仏上人

近ごろ「除夜の鐘を撞くのを控えてほしい」という訴えが近隣住民から出ていると聞く。私のお預かりしているお寺でも、「紅白歌合戦が聞こえん。十発までにしてくれ！」との苦情電話があったことが思い出される。

この一年を振り返れば、待機児童を減らすための保育園建設において「他所に建てるのは賛成だが、近所に造られては困る」と、矛盾に満ちたニュースが思い起こされる。正義を立場として「くすぶき」と振りかざすものの、己の身に降り掛ければ、反旗を翻すのは世の常なのだろうか。かく言う私も、最も身近な人との関係がギクシヤクするときに、私の中に潜む底知れぬ矛盾が顔を出す。

臨床心理士の西野敏夫さん(本誌六・七面)から、「夫婦喧嘩などで、わざと『バンッ!』と乱暴に扉を閉めたり、食器を乱暴に扱うなどの行動は『ちゃん』と私のことを見てよ、愛してよ!』というメッセージ(メタコミュニケーション)が含まれている」という話を聞かせて戴いた。さらに、「檀家さんは潜在的にご住職さんに喜んでもらいたいと思っけています。だから『いい話を聴かせて貰いました』と言うのです。嘘ではありませんが眉唾と思っけてください」という言葉に、ハッとさせられた。

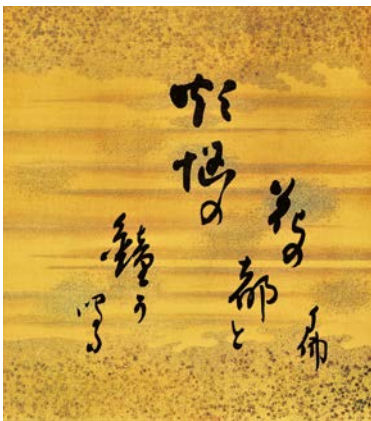
研究生と私が共に受けもつ真宗門徒講座では緊張の極みの中、必死に研究

生が講義をする。彼の前には八十名程の受講者が固唾を飲んで聴聞しておられる。主幹という立場で私自身は、彼を心配していた。しかし講義後の座談の法要であるということ学びました」と発言されたのを聞き、語る者の姿勢がいかに大切かを知らされた。その一方で緊張することもなく、大きな声で流暢に語る私の話ほどのように伝わっているのか、不安がよぎる。

世間では百八の煩惱を払うといわれる除夜の鐘。これまで漠然と聞いていたが、私の煩惱の具体性は正義や矛盾、愛、善意、努力、我慢、熱意という姿で、我が身に満ちみちていたのである。

「花の都」と譬えられた報恩講。お勤めした感動も束の間、すぐに醒めてしまふ、当に煩惱興盛の我が身を詠われた句仏上人の句を憶いつつ、新年を迎えたい。明年も宜しくお願い致します。

(主幹 荒山 淳)



『句佛上人百詠』(培風館、1918年発行)

聖典研修

『仏説阿弥陀経』—その教義と真宗の儀式—

第十七回 二〇一六年九月二十九日(木)

宝池莊嚴

講師 廣瀬 惺氏 (同朋大学特任教授)



「水」によって表されるもの

宝池莊嚴に入ってまいります。その中で特に、

また舍利弗、極楽国土には、七宝の池あり。八功德水その中に充滿せり。池の底にもつばら金沙をもつて地に布けり。四辺に階道あり、金・銀・瑠璃・玻瓈、合成せり。上に樓閣あり、また金・銀・瑠璃・玻瓈・磤磤・赤珠・碼碯をもつてして、これを嚴飾せり。 (『聖典』一二六頁)

とある教説の意をいただきたいと思ひます。ここで「池・水」として表されているものですが、曇鸞大師の『論註』の「水功德」を通して一言で申しますなら、「生活感情」と言えるのでないかと思ひます。法に遇えば、遇った人の上の開かれてくる生活感情がある。そのことが「八功德水その中に充滿せり」と、水で表されているのでしよう。この感情は法が開いてくださるものですから、執を離れた一如平等の感情と言えるかと思ひます。そのことと思ひますのは、曾我量深先

生が仏教の智慧(無分別智)を「純粹感情」とおっしゃっていることです。このことを通して、本願に生きる人に開かれてくる生活感情は純粹感情であり、それは智慧だといたいておられます。そして、その純粹感情の内容が「八功德水」として八つの豊かな内容で説かれているのです。

また一方で、曾我先生は私たちの迷いの根本であります無明を「不純粹感情」とおっしゃっています。執に閉ざされた感情と言つてよいかと思ひますが、そのような感情に基づいた私たちには、公正な認識は成り立たないわけです。認識の基盤である感情が濁つていけば認識も濁つている。公正なつもりでいても、自己中心性を帯びた判断・認識とならざるをえません。

穢土を穢土として

今一度、宝池莊嚴の文をご覧いただきたいと思ひます。そこに大切な事柄として、「水」と共に「樓閣」が説かれていきます。「樓閣」とは高殿です。ものを眺めて

見渡せる見晴らし台のような場所です。水と見晴らし台がセットになって説かれているというところは、純粹感情(執られるを離れた感情)において、物事がそのものとして受け止められていくということとを教えてくださっているといただかれます。

その内容の一つとして、穢土が穢土として認識され、生きられていくということがあります。そのことを教えてくださっているのが親鸞聖人の『浄土和讃』です。

智慧の光明はかりなし 有量の諸相
ことごとく
光暎がぶらぬものはなし 眞実明に
帰命せよ (『聖典』四七九頁)

「智慧の光明」とは本願が開いてくださる智慧(純粹感情)です。どこかにある光明ではなく、本願に生きる人の上の開かれてくる感情(智慧)です。そこで注意されますのは、親鸞聖人が「有量」に「有量は世間にあることはみな量りあるに よりて有量という」と、片仮名で左訓を付けておられることです。これは簡単なようですが、本願に基づく智慧が開かれなければ、そういう認識は私たちには成り立ちません。

私たちはどうしても目の前にある事柄や現実を絶対化し、そのことに執られるて苦しみや迷いを抱えて生きています。たとえ「相対的なものだ」とわかっていても、生活はそうなっていくまません。親鸞聖人は、「はかりな」い智慧の光明によって、世間の事柄を有量の諸相(相対的なもの)として生きられていくことを教えてくださ

つているわけです。

絶対化の苦しみ

そのような問題と格闘なさりながら親鸞聖人の教えに学んでいかれた方に、笠原初二という方がおられました。私が教養研究所に勤めておりました頃、同和推進本部(当時)にいらつしました。笠原さんは学生時代から差別問題に取り組んでおられました。その運動の仲間の中でまた差別が生まれるなど、様々な矛盾が生じてくる。そのような行き詰まりの中で、親鸞聖人に救いを求めていかれました。

笠原さんは昭和五十五年九月に亡くなられましたが、『なぜ親鸞なのか』(法蔵館)という遺稿集が出されています。その本を読みますと、差別問題等の社会問題を絶対化していくことと格闘なさつていかれたことが教えられます。いわば、人生の全体性が見失われていくという問題と言つてもいいかと思ひます。私が笠原さんと最後に言葉を交わした時に「差別を問題にしている自分と、人生の意味を尋ねている自分とが分裂している」とおっしゃった。その言葉が忘れられない言葉として残っております。

現実の事柄に対する絶対化を克服するということは容易なことではないと思ひます。その絶対化を乗り越えさせようとしてくださるのが弥陀の本願だと思ひます。きくくださっているのが、宝池莊嚴の教えの大切な内容だと受け止めております。

第十八回 二〇一六年十月二十八日(金)

「臨終来迎」にどう答えますか？

講師 竹橋 太氏 (儀式指導研究所研究員)



有る・無いだけでは語れない

自分の臨終に際し、阿弥陀様がお迎えに来られることを願っている人がいます。皆さんならそういった方々に対し、どのように答えますか。『阿弥陀経』に臨終来迎のことが書かれている点を考えても、決して無視はできない問題でしょう。

一心にして乱れざれば、その人、命終の時に臨みて、阿弥陀仏、もろもろの聖衆と、現じてその前にましまさん。この人、終わらん時、心顛倒せずして、すなわち阿弥陀仏の極楽国土に往生することを得ん。

〔聖典〕二二九頁

この文章をもって、臨終来迎が実際に有るのか・無いのか、ということの問題にするのは困難なことだと思えます。一方で、「真宗の教えでは臨終来迎は説かない」という否定的意見もあります。

親鸞聖人の仏教は、そういったことに白黒を付けるためのものではありません。親鸞聖人は「顕彰隱密」を説く中で、どちらか一方を否定していくのではなく、臨終来迎などの表現の奥深いところにある問題を読み取っておられます。そのこと

を通して、どちらも迷いであるとは分かる、そういった煩惱を生きているわたしなのだと思わせていく教えなのだと思います。

宗祖と臨終来迎

私たちが浄土に往生するのは生きている間のことか、亡くなった時のことかについて、法然上人がまだご健在だった頃に論争があったと『口伝鈔』に書かれています。親鸞聖人が、肉体を失う死と関係なく人は往生するという「不体失往生」を主張し、同門の弟子である善恵房証空が、死の瞬間に人は往生するという「体失往生」を主張されました。これに対し法然上人は、そのどちらの意見もお認めになられ、次のようにおっしゃっています。

善恵房の体失して往生するよしのぶるは、諸行往生の機なればなり。善信房の体失せずして往生するよし申さるるは、念仏往生の機なればなり。

〔聖典〕六六五頁

まず「体失往生」に対して言われた事柄について考えたいと思います。「諸行往生」とは、善いことをたくさんした結果

として、亡くなる時に来迎があり浄土に生まれていくという在り方です。法然上人、親鸞聖人はこの往生を「無量寿経」の第十九願(「たとい我、仏を得んに、十方衆生、菩提心を発し、もろもろの功德を修して、心を至し願を發して我が國に生まれんと欲わん。寿終る時に臨んで、たとい大衆と圍繞してその人の前に現ぜずんば、正覺を取らじ。」「聖典」十八頁)の在り方だとおっしゃっています。それ故、この願は「修諸功德の願」「来迎引接の願」とも言われます。つまり臨終来迎が無いとは言っていないのです。

一方で、「不体失往生」を「念仏往生」、つまり第十八願の実現だとおっしゃっています。前の『口伝鈔』の続きにはこうあります。
如来教法元無二なれども、正為衆生機不同なれば、わが根機にまかせて領解する条、宿善の厚薄によるなり。念仏往生は仏の本願なり。諸行往生は本願にあらず。

〔聖典〕六六六頁

一連の文章を見るに、第十九願(臨終来迎)は間違いだと思定することはできません。諸行往生としてあるわけではないと思います。諸行往生ではないからです。しかし、念仏往生ではないとハッキリおっしゃっています。ですから、諸行往生を往生として認めているとも、本当の念仏往生ではないという批判とも、両方の意味で解釈できます。

生死輪廻を求める私

臨終来迎(第十九願往生)を求める人に対して「それは真宗ではない」と否定したならば、そこで終わってしまうでしょう。親鸞聖人はそこから、私たちが第十八願の機であることを説き、念仏に続く道を示してこられました。つまり、第十八願の救済をいただいでいくためにも、そこに至るためにも第十九願の救済が重要になることもあるのです。そういった点から、第十九願は第十八願に包まれていると言えます。

私たちが今の自分を受け取るために、努力が報われる世界を思い描きます。そういった自分の価値観によって未来や過去を作ります。言い換えれば、「頑張った分は報われなければならない」という世界を現世だけではなく、死後においても想定しているのです。このような輪廻を求める私たちの煩惱、自力の問題が、臨終来迎の背景には存在するのです。

私たちが元々持っている煩惱の在り方を明確にすることなく、臨終来迎に対して有無だけで判断することは仏教の目的ではありません。親鸞聖人の教えは、そういった問題を包み込んだ上で、私たちの根本的な在り方を明らかにするものだと思います。

の派の
谷近現代史

第二十八回平和展に向けて

「満洲開教」と「開拓民布教」

名古屋教区教化センター研究員

新野和暢にいの かずのぶ

はじめに

かつて大谷派は、大陸に開教使を派遣し布教活動を行った。布教の範囲は、戦争拡大とともに広がって行き、敗戦とともに終了した。こうした「大陸布教」の中に特殊な布教がある。それが、「開拓民布教」である。この布教は、一九三二年三月一日に発足した「満洲国」へ日本人移民を送るという国策に、大谷派が積極的に関わった開教である。「開拓屯田僧」と呼ばれた開教使による「開拓民布教」の一端を取り上げておきたい。

【開拓民布教とは何か】

『真宗』の一九四二年八月号に「外地・植民地・外国布教状況調」が掲載されている。中国や「朝鮮」、台湾、フィリピンなどに広がる大谷派勢力が示されている。そのうち、「満洲」での活動が別院と布教所、さらに「開拓地布教」の三つに分類されている。「開拓地布教」とは、「満洲」に移民した日本人村での布教を指している。但し、本稿では、開拓地に移住した日本人に対する布教を主に扱ったという実体を重視して「開拓民布教」と表記しておきたい。この「開拓民布教」は、広義の意味で「満洲開教」に含まれている

が、特徴がある。「開拓」によって設立された日本人村には、神社が建立されるとともに、「一村一寺」の方針で日本仏教が活動し、とりわけ大谷派が「弥栄村」で先鞭を付けた。続く開拓村の千振村、瑞穂村などにも布教所を設立し、大谷派の独壇場であった。

【満洲開教のはじまり】

「満洲」と呼ばれた中国の東北部地域における日本仏教の活動が注目を集めたのは、日露戦争（一九〇四年二月八日～一九〇五年九月五日）の頃である。本願寺派僧侶一三人を初めとする仏教各宗派が従軍布教師を派遣し、日本のキリスト教系組織も軍隊慰問のための伝道を開始している。大谷派も従軍布教使を送り出すとともに、一九〇四年十一月十日に大谷瑩温（第21代法主大谷光瑩の子）を「満洲軍慰問使」に命じている。従軍布教使は、軍に帯同して慰問したり、中国語通訳を務めたりといった活動を行った。

日露戦争に勝利し、長春から大連間の鉄道施設とその付属地の権益を手に入れた日本は、それらの地域で活動の範囲を広げていった。そして、大谷派も本格的に「満洲開教」に着手していった。よく

知られているのは、大連別院を建立した新田神量（滋賀）の布教である。一九一〇年一月十日に開教使を命じられると、同年四月、大連で別院創立事務所を開設した。そして、大慈園という孤児院を経営するなど、大連に移住した日本人だけでなく、現地で生活する人々に対しても布教活動を行った。

【満洲事変と大谷派】

「満洲開教」の転機は、一九三一年九月十八日の「満洲事変」である。日本の謀略によって始まった戦闘は瞬く間に拡大し、それを短期間で制圧すると、中国東北部に「満洲国」の建国を宣言するに至った（一九三二年三月一日）。しかし「満洲国」を日本の傀儡であることを問題視した国際社会は、それを認めなかった。日本は国際的に孤立し一九三三年三月二十七日、国際連盟の脱退表明に至った。



「弥栄村」に開設された「弥栄東本願寺」の写真
(真宗大谷派大阪教区 所蔵)

大谷派は「満洲事変」の翌十九日に大連別院の新田に対して、翌二十日には朝鮮開教監督兼京城別院輪番の栗田恵成に対してそれぞれ軍隊慰問を命じて、事態を把握すべく情報を収集した。その後、慰問金を手配したり、「軍人名号」を送ったりするなど、「満洲事変」を支援した。阿部恵水宗務総長は同年十月三十日に、「殊に職に布教に在る者は勿論各寺院住職協会管理者に於ては其の門信徒に対し能く斯の趣意の徹底に努めらるべし」と諭達し、国策に協力することを求めた。そして、一九三一年十一月十四日、国際連盟議長宛に「満洲事変」の正当性を記した書簡を送付した。「満洲国」の建国に際しては、法主の大谷光暢が賀表を送った。一九三三年三月十三日、真宗各派協議会は国際連盟脱退に関する協議会を開催し、脱退を通告した三月二十七日には、真宗各宗本山聖旨奉戴の告示を發し、脱退を支持した。

【第一次武装移民団】

一九三六年に入ると五〇〇万人もの日本人を「満洲」に移住させる計画が持ち上がるようになるが、これを国策とするか否かを決定する前段階として、試験的な移民が試みられた。これが、第一次武装移民団である。一九三二年十月十四日、第一次武装移民団の約五〇〇人が、佳木斯ジャムス（現在の中国黒竜江省佳木斯市）に上陸した。彼らは、ここから南東へ六〇km行った先の永豊鎮えいほうちんという場所に村落を作ることを試みたのである。しかし、そ

の地は既に現地住民が暮らしており、日本人と交戦することも少なくなかった。日本人は彼らを「匪賊」と呼び、移民団は武装して戦った。翌三十三年二月十一日に先遣隊が、迫撃弾を「匪賊」の住居に撃ち込んで占拠した。その後、一九三五年三月に、「弥栄村」と命名し自治を宣言した。

【大谷派と武装移民団】

大谷派は、この武装移民の政策に積極的に関わった。すなわち、一九三三年二月一日に「満洲拓事講習所規定」を定めて、「満洲国の開拓と開教に關し有為の人材を養成」することを目指した。同年三月二日、「拓事講習生」（満州屯田僧）三〇人が本山で法主より親言を受けると、すぐさま翌日に「満洲」へ出発した。その後、「満洲国」の旅順民政署管内山頭会沙包屯にて、満州拓事講習所開所式を挙げ二十五人が入所した。この講習所の実体は詳らかではないが、一九四〇年四月二十六日に大谷大学卒業生六人が満蒙開拓訓練生として「哈爾濱開拓指導者訓練所」に入所したという記録が見られることから、ある程度の規模で開拓民指導者の養成に携わっていたことになる。これらの講習所は、公的な機関ではなく大谷派が独自に設置したものだ。人材育成は困難であったようである。

【弥栄東本願寺】

「弥栄東本願寺」は、高橋麗真（岐阜）が一九三三年六月一日*1に永豊鎮に駐留

を命じられたことに始まる。同月二十二日には「満洲駐屯軍布教」を命ぜられていた記録も見られることから、武装移民団と共に行動する従軍僧として携わったと思われる。高橋がどの様な形で布教活動を行ったのかについては不明であるが、布教所を設置したという公式記録はない。その後、本多賢純（東京）が一九三五年十月二十五日に弥栄駐在になると同月二十九日、高橋は永豊鎮駐留を辞任し帰国した。本多が「弥栄村」に駐在を始めたこの頃、村としての機能が整えられるようになり、「弥栄神社」が十月十四日に建立され、また、同年十一月十四日に、弥栄小学校が創設されている。本多は布教活動の傍らで、小学校での教育にも携わっている。

同年十二月三十一日になると、入仏法要を挙行し「弥栄布教所」を立ち上げた。



虎退治をした「弥栄村」の人々（『弥栄村史』より）

「土民の家屋を改修してお寺を完成した*2」という記録があり、いわば仮本堂的なものであった。

本堂が竣工したのは一九四〇年のことだ。『弥栄村史』には「村民のための集会場修養場として使われるため新寺院に着手、工費千円万の予算*3」と記録されている。本堂の建設用材を切り出す際、虎が行われ二頭の虎を捕らえている。そのうち一頭は剥製となって、一九四二年四月二十五日に本山東本願寺に寄進された。

こうして「弥栄東本願寺」での活動が行われていったが、十五年戦争の戦況悪化に合わせるように、開拓民の男性が次々に現地応召されていった。本多も例外ではなく、一九四四年二月二十八日に現地応召入隊している。これを受けて、翌三月二十日に本多明が在勤となったが、まもなく敗戦を迎えて「弥栄村」を放棄することになった。敗戦とともに大谷派の大陸布教も終わりを告げたのである。

【大谷派の開教への認識】

大谷派は「大陸布教」をどのように考えていたのだろうか。それを象徴するやり取りが第六回宗議会（一九三二年六月十〜二十四日）で行われている。「満洲開教監督」の宮谷法含は「満洲開教」について、「私は永久的彼地に駐留するか否かそうした事は言明できないが、開教進出の実を挙げる事は私の力と云ふよりも一派としての問題である。従つて如何に進派が監視すべきで私としては失敗の例の

多い開教地の轍を踏まぬやうに尽したいと考へるのである*4」と述べている。開教の失敗とは、開教地で日本宗教が宗派争いをしたり、語学が未熟であるために思った様な成果が上がらないことなどを指していると思われる。そうした失敗を繰り返さないことを「満洲開教」に求めているのである。それは、そこに携わっているだけでなく宗門全体の事業として行っていくことが必要であることを提起している。さらにこの文脈から見えてくるものは、「開拓民布教」に率先して携わることで、他宗派に先んじた開教を実現したいという考えである。大谷派の「開拓民布教」は、開教使の育成から派遣までの一連の道筋を付けようと宗門内の整備を進めていったことが「独断場」で始まった背景の一つに数えることができるのである。

以上

*1 『宗門開教年表』（大谷派組織部編、一九六九年十月三十一日）による。なお、『弥栄村史』（弥栄村史刊行委員会、一九八六年五月十日）には、八月十五日とある。

*2 『弥栄村要覧』山崎芳雄著、一九三六年六月一日、満州移住協会、一三七頁

*3 『弥栄村史』三十頁

*4 『真宗』昭和七年八月号、十七・十八頁

現代社会と
真宗教化

講義抄録

どのよう
に目の前の
悲嘆者と向き合
うのか臨床心理士
西野 敏夫氏

「子どもが自死しました」法務の中で、悲嘆にくれる声を投げかけられた時、どのように対応するのか。抱えきれない悲嘆や憤りをそのまま受け止めるのか、聞き流すのか。聴き手の私たちにも動揺がつきまとう。

十一月八日、宗派を超えて自死遺族に寄り添う「いのちに向き合う宗教者の会」が主催する「第八回 自死者追悼法要 いのちの日のいのちの時間」（※8面に報告記事）の事前学習会に参加し、自死、依存、虐待などで苦しむ人々と対話が続ける西野敏夫氏（臨床心理士・カウンセリングオフィス「ひいりんぐ工房とぼす」主宰）からお話を伺った。

悲嘆者に接する機会が多い僧侶に向け、貴重な助言をいただいたことから、本稿にて抄録として紹介する。

孤立する自死遺族

私たちは「自死遺族」というものをひとくくりにしがちですが、様々な方がおられます。

自死遺族ではありませんが、わかりやすい例えとして紹介します。精神病院に何度も入院を繰り返していたアルコール依存症の方がおられました。しばらくすると、私のところにも顔を出さなくなりましたが、三年くらい経って突然、その方の奥様が晴れやかな顔でいらつしやいました。それを見て私は、旦那が頑張って断酒を続けておられるのかなと考えました。すると奥様は「旦那、死にました」とニコニコ笑っていたのです。長い間想像を絶するご苦労をなさっていた

ので、ちょっとホッとしていたのですね。ところが、その奥様は数年経って鬱病になりました。一時的にホッとしても、しばらく経ってから「あの時こうしていたら」「もっと何かできたんじゃないか」と考えを巡らせていくうちに鬱病を発症してしまふこともあります。

このように、長い経過の中でご遺族の心情も変化していきます。一人の方が自死なさると、五人から十人のご遺族がうまれます。一つの家族であつてもそれぞれ異なった状況を抱えています。中には「自分だけ勝手に死にやがって」「私たち家族は一体どうなるんだ」と故人に怒りをぶつけるケースもあります。

僧侶の皆さんには、ご遺族の方から不満や、怒りや、理不尽なクレームをつけ

られることがあると思っておいてください。それはある意味、認められているのです。ご遺族はとても傷つき、弱り、困っています。PTSD (Post Traumatic Stress Disorder: 心的外傷後ストレス障害) によつて非常に過敏になつておられる場合もありますし、「宗教者だからなんとかしてくれる」という過剰な期待も持たれます。だから許容してくれそうな人を見つけると、普段外に出せない怒りをぶつけてしまうことがあります。これは普通の現象です。

ご遺族は周囲から孤立して、やりきれない思いをどこにも持つていけません。それは時に社会への不信任や怒りになり、ともしれば手を差し伸べてくれた人にすら「どうせ何もわからないじゃないか」となつてしまいます。しかし、不満や怒りを向けられたりしたら「怒りをぶつけてくれてありがとう」と受け取つてみてください。

ちゃんと私に向き合つて！

対話の中で、わずかにお話しください。た言葉だけでは、全てを判断できません。隠されたものの方が大きいのです。例えば、小さなお子さんの「パパ大嫌い」という言葉は「パパ大好き。もつと僕のことを見て！もつと遊んで！」の裏返しです。そこにはきちんと向き合つてほしいという思いが含まれています。それを「大嫌い」というメッセージで出すのです。すからもし「坊主のくせに！」と言われ

ても感情的にならず「この人は助けを求めているんだ。もつとちゃんと話を聞いてほしいんだ」と理解してください。

ご遺族の方々は、ただでさえ愛する家族を亡くしたという悲嘆に加え、周囲から心ない言葉を受けたり、公共交通機関や賃貸物件での自死の場合は金銭的な補償の問題も抱えます。最悪、引越さなければならぬ。このようにご遺族は理不尽なダメージを次から次へと受けていきますが、それが全部相談者に語られるわけではありません。多くの人は思っていることの二割ぐらしか話しません。何から何まで話してくれることを期待してはいけません。一割でも二割でも、一杯話してくれたことに耳を澄ませ「これだけじゃないよね。もつと大変だよ。よくお話してくださいましたね」とお話しくださつたことを十分に労ってください。

生きる意味なんてなくていい

ご遺族というのは後追い自殺を含め、その後の鬱状態から自死されるリスクが非常に高い。私たちは良かれと思つて「そんなことを考えちゃだめだよ、命は大事だよ」と説教したくなります。しかし、ご遺族に「わかりました。ご迷惑かけしました」と言わせてはいけません。それはご遺族からの「もう二度とあなたには話をしません」というメッセージです。ついでに説教をしたくなる理由は、辛い話を聞いた私たちが安心したいからなのです。その結果、ご遺族に「もう大丈夫です。お

かげで元気になりました」と言わせてしまおうのです。

私たちは、生きることや死ぬことに必要以上の価値を置いてしまっています。先日、中学生に「生きる意味が分かりませんか」と相談されました。「頑張つて意味を見つけてよ。やりたいことないの?」とは決して言わず、「意味なんてないから心配しなくていいよ。とりあえず旨いもん食つて寝ておけばいいんだよ」という話をします。意味なんか求め始めるとしんどくなるだけです。もちろん意味を見出せる人もいます。でもそうじゃない人も沢山います。そういう人たちに無理やり意味を見出させるより、「意味がなくても生きていける」ということをお伝えしています。

いい加減が良い加減

私も最初の頃はムカつとしたり、悲しんだり、何もできなくてどうしようと悩みました。しかし、私も皆さんも共通していることがあります。それは、私たちは無力だということです。ここを受け入れられるかがとても重要です。

精神科医であり、心理学者でもあるユング (Carl Gustav Jung: 1875~1961) という方がいらっしゃいました。彼はアメリカからスイスまで訪ねてきたアルコール依存症の患者に対し、「私にできることは何もありません」と言つて追い返しました。しかしその後、追い返された人は同リアルコール依存症の人と出あい、今

でいう自助グループ(共通体験者の分かち合い)の原型を自発的に始めたのです。

私はユングの「Nothing I can do」という言葉をとても大事にしています。私たちはつい何かしたくなる。役に立ちたくないです。でも「役立たず」と言われたら、褒められたと思つてください。

私たちは間違える生き物です。いくら高尚な方でも間違いを犯すのです。塵ほどの間違いもないように生きていくことが誠実なではありません。間違えた時にそれをただちに認められることが誠実さなのです。キリスト教の神父さんや牧師さんは、自分が何かをしてあげるとは一言も言いません。「神様が何とかしてくれるよ」と言うのです。だから自分は役立たずでいられるのです。皆さんも「宗教者としての自分が何かをしてあげられる」のではなく、そのバックボーンになつていくものがあるはずですね。例えば、

宗教は素人ですが、真宗で言われる他力本願というのは、私が無力であるために重要なことなのではないかと思つています。私が大好きな近藤恒夫さん(薬物依存者の回復施設「ダルク」創設者)は、常々「何事も真面目に一生懸命やらない」とおっしゃいます。真面目に一生懸命やると「こんなになつてゐるのにどうして上手くいかないんだ」と、次第に嫌になつていくからです。大阪ダルクを設立された倉田めばさんは「安心して、ちよつと具合が悪くいられるといいよね」と言います。「具合が良くなるといいよね」ではないの

です。思い通りにならない社会の中で、ちよつと具合悪いままで、安心して暮らせることが大切なのだとおっしゃいます。

そのままでもいいんだよ

私は思春期からひどい強迫症状がありました。手を洗つて蛇口をしめると汚れてしまうので、また洗う。火の元や鍵を何度も確認しにいつて学校に行けなくなる。寝る前に、トイレと布団の往復を一晚中繰り返し返す。明らかにおかしいです。今だつたらすぐに病院やカウンセリングに連れて行かれます。この強迫行動は、うちの親父に「お前、何やつとんだ!」とバコンと殴られる。そうすると、びえーつと泣きながら止まる。で、泣きながら寝るのです。そんな日々を過ごしていました。

誰もが僕をおかしい奴だと思つていました。しかし、誰一人それを強制的に治すとか、どこかへ入院させたりしませんでした。今思えば、許されていたんだと思つています。親も大変だったと思つています。一度だけお袋に手を引きずられて「一緒に死んでやる」つて海の中に引きずりこまれました。それでも許されていたんです。おかしいままでいることを、生きていくことを。これが、私が今なんとか生き延びられている原点だと思つています。

ご遺族はとても辛いし、とても申し訳ない。その上にいろんな問題を抱えていきます。聞いている方も辛くなるので早く解消してあげたいと思うのですが、「今は辛

いけれど、当然ですよ。無理になんとかしようとしなくても大丈夫ですよ」つて本当に認めてあげられて、安心して問題を口に出せる環境や関係を私たちが作つていけるのかどうか、それがとても大事なことだと思います。

【編集後記】

私たちは深い苦悩や涙を目前にすると「何かしてあげたい」という思いが起る。私も被災地を訪れた時「僧侶として何ができるのか」という使命感が生まれた。それは次第に「僧侶らしさ」という足枷となり、如何ともしがたい現実との間で煩悶した。被災地の方々は、必ずしも私が「僧侶らしく」いることを求めてはいなかった。結果、その「らしさ」は目の前の悲嘆の声に耳を塞ぎ、追い打ちをかけるように傷つけることにもなった。そんな私に西野先生は、「無力と知ることとは他者にとって力(はたらき)となる」と教えてくださった。

自死、DV、依存、虐待、孤独など様々な社会問題の中にあつて、今一度、親鸞聖人が「非僧非俗」と語られた苦悩と願いを思い出したい。誰もが無力な人間のままで許しあうやわらかな社会を願つて。

(研究員 大河内真慈)

現代社会と真宗教化 報告

自死者追悼法要

「いのちの日 いのちの時間」厳修

いのちに向き合う宗教者の会 主催
名古屋教区教化センター 後援

12月5日、自死者を憶念し、自死遺族と宗教者が共にいのちの尊厳に向き合う時を過ごすことを願って「いのちの日 いのちの時間」が、名古屋別院対面所にて厳修された。

今回で8度目となる同法要では、宗派を超えて集まった僧侶(いのちに向き合う宗教者の会)の呼びかけにより、教化センター後援、名古屋別院協力のもと、各宗派の特徴を生かした法要と遺族同士による「わかちあい」が行われた。

参拝者からは、「故人と死別してから、こんなに優しくされたのは初めて」「普段は考えないようにしているけれど、久々に故人と向き合えて有難かった」「自殺者は地獄に落ちると言われ、自責の念と重

なって今まで辛かった。今日は同じ思いの方々と故人と向き合うことができて救われた」などの声が聞かれた。

自死遺族は、日常生活の中で故人のことや胸の内の苦悩を他者に打ち明けづらい環境に置かれている。安心して故人と自身の気持ちに向き合うことのできる「場」が求められている現実を思い知らされる。

そして、寺を開くということの意味をあらためて考えさせられる法要であった。



INFORMATION

教化センター日報

■2016年9月～11月

- 9月5日 研究業務「平和展」学習会
- 8日 研究業務「自死遺族わかちあいの会」打合せ
- 9日 研究生・実習「真宗門徒講座(真宗門徒のくらしとつとめ①)」
- 15日 研究生・学習会「真宗門徒講座 事前学習」
- 27日 研究業務「平和展」学習会
- 28日 研究生・学習会「真宗門徒講座 事前学習」
- 29日 教化研修「聖典研修⑰」(廣瀬惺氏)

- 10月3日 研究業務「自死遺族わかちあいの会」後援
研究業務「平和展」学習会(名古屋別院主催「人生講座」共同企画)
- 7日 研究生・実習「真宗門徒講座(真宗門徒のくらしとつとめ②)」
- 14日 研究生・学習会「聖教に学ぶ①」
- 20日 研究業務「平和展」学習会
- 28日 教化研修「聖典研修⑱」(竹橋太氏)
- 11月8日 研究業務「自死者追悼法要 事前学習」後援
- 15日 研究生・実習「真宗門徒講座(真宗門徒のくらしとつとめ③)」
- 17日 教化研修「聖典研修⑲」(廣瀬惺氏)
- 21日 研究業務「平和展」学習会
- 29日 研究業務「自死者追悼法要」打合せ

事務休暇・図書の出借停止について

事務休暇について

- ・2016年12月29日(木)～2017年1月7日(土)の期間を事務休暇とさせていただきます。
※年始の業務は1月10日(火)から再開させていただきます。
- ・午後5時閉館：2017年1月23日(月)
- ・臨時閉館：2017年1月28日(土)／2月4日(土)／2月10日(金)

図書の貸出停止について

- ・図書整理のため、2017年1月23日(月)～2月9日(木)までの期間、教化センターの書籍・視聴覚教材等の貸出を停止させていただきます。(館内での閲覧はできます)
- ・借り受け中の書籍・視聴覚教材は、1月21日(土)までにご返却願います。

第28回平和展「十五年戦争・前期 満洲事変と開拓団」(仮題)

【日 時】2017年3月17日(金)～23日(木)

午前10時～午後6時

※初日は午前11時から／最終日は午後5時まで

【会 場】名古屋教務所1階 議事堂

【入場料】無 料

主催：真宗大谷派名古屋教区教化センター

協力：真宗大谷派名古屋教区教化委員会、真宗大谷派名古屋別院

名古屋別院・春のお彼岸への参拝とともに、是非お立ち寄りください

4月1日(土)から土曜日も休館いたします

「名古屋教区教化センター使用規程」の変更に伴い、4月1日(土)より、教化センターの使用及び書籍・視聴覚教材の利用の受付について、日曜日(祝日及び別に定める休日を含む)に加えて、土曜日も休館とさせていただきます。何卒ご理解・ご協力をお願いいたします。

《雑感》

映画「シン・ゴジラ」にハマった。観賞回数はすでに10回を超え、劇中の音楽が四六時中、脳内で流れている。フィギュアや公式記録集も予約済みだ。我ながらバカだとは思ふ。しかし、私にとってはそれほど衝撃的で、何度でも観たいという衝動に駆られる映画だった。ある意味、2016年最大の衝撃だったと言ってもいい。

ゴジラは、その時代を映す鏡としての役割を背負ったメタファー(隠喩)であり、カリカチュア(風刺画)でもある。1954年の初代「ゴジラ」では戦争と核爆発の恐怖、そして人間の業を背負っていた。今回の「シン・ゴジラ」が背負っているのは、東日本大震災の津波と原発事故の恐怖、そして62年前から何ひとつ変わらない人間の業ではないか。少なくとも、私にはそう感じられた。

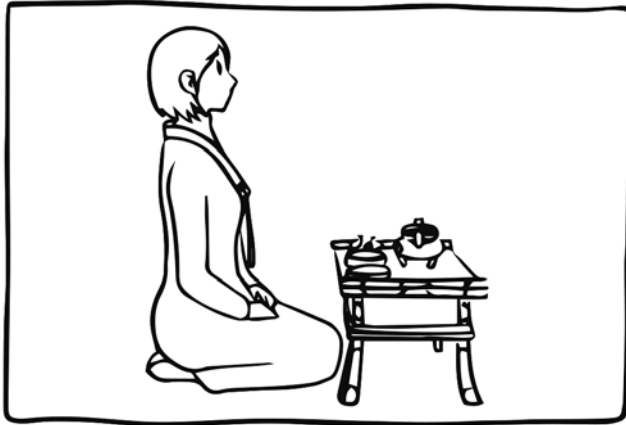
震災から5年9ヶ月。当時の記憶を少しずつ失いつつある私に、スクリーンに映し出されたゴジラは語りかける。「お前はあの時、何を思った?」「そこから、何を学んだ?」「そして今、何をしている?」と…

(て)

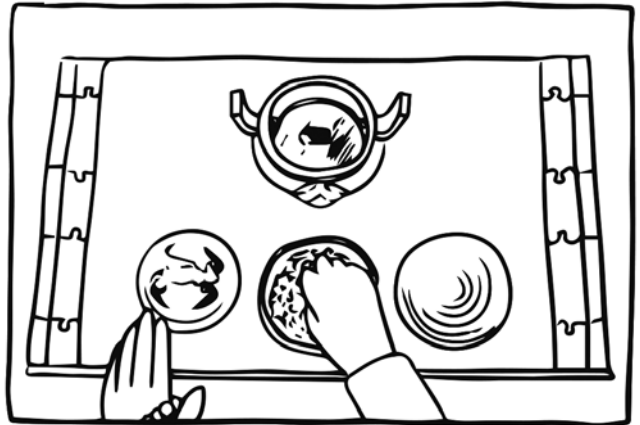
■教化センター

〈開 館〉月～金曜日 10:00～21:00
土曜日 10:00～13:00
(日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)
〈貸し出し〉書籍・2週間、視聴覚・1週間
～お気軽にご来館ください～

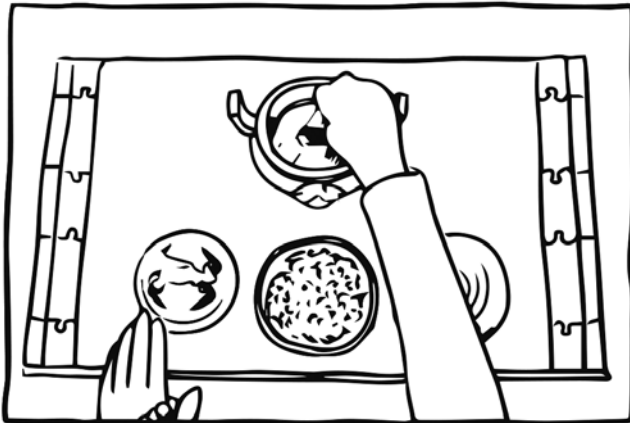
焼香の仕方



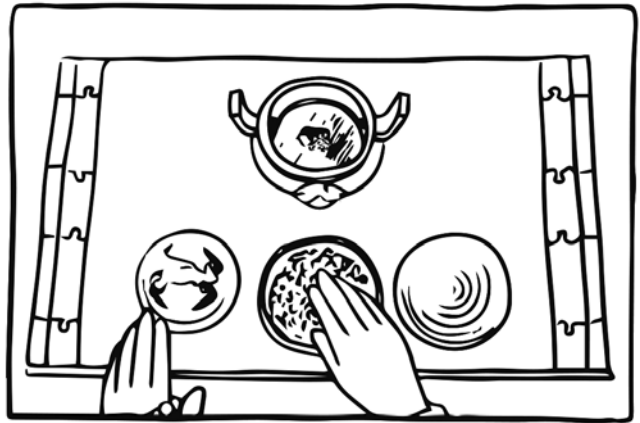
① ご本尊^{ほんぞん}を仰ぎ^{あお}見る^み



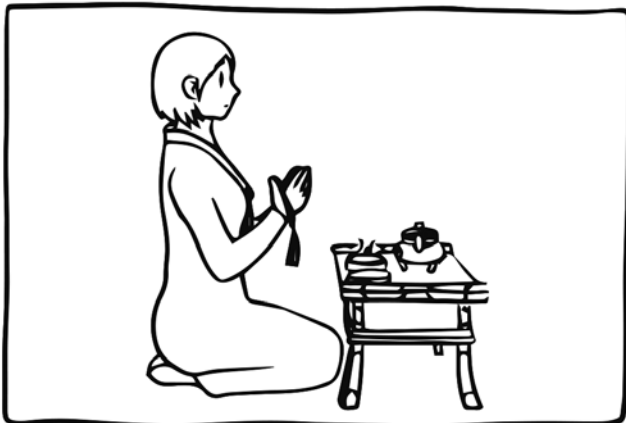
② 左手^{しゅくはし}を卓端^そに添え右手^{こう}で香をつまむ



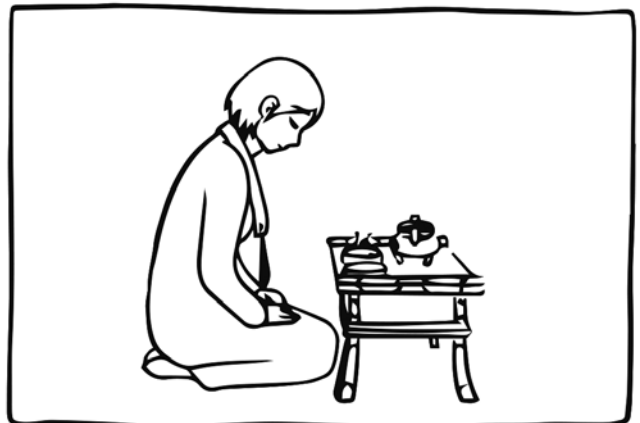
③ 香炉^{こうろ}に2回入れる
(香^{こう}をおしいただく必要はありません)



④ 香^{こう}の乱れを整える



⑤ 合掌^{がっしょう}し 念仏^{とな}を称える



⑥ 合掌^{がっしょう}を解き 礼拝^{らいはい}

イラストカット集 寺報やチラシなどにお使いください。

- データを希望される場合はお問い合わせください。
- イラストを使用した印刷物をお寄せください。

※用途にあわせて、切り貼りなどとしてご使用いただけます。
※あくまでもイメージです。ご了承の上お使いください。